



風 狂

第63号

特集 追悼・北岡善寿氏

風狂の会

【詩】

生 命	長尾雅樹	
私のこと		高 裕香
まほろばの貴婦人		富永たか子
〈希望〉ならその〈希望〉のかたちを.....		原詩夏至
演劇の真実		高村昌憲
逃げる		出雲筑三

【風狂ギャラリー】

三浦逸雄の世界（四十七）	三浦逸雄
--------------	------

【特 集】追悼・北岡善寿氏

追悼の辞	浜田 泉
北岡さんのこと	なべくらますみ
無限の空	原 詩夏至
風狂尋ね人 善寿さんを偲ぶ	出雲筑三
善寿さんのこと	高島りみこ
北岡善寿先生	高 裕香
北岡先生永眠	神宮清志
北岡善寿先生を偲んで	さとうのりお
交わり	富永たか子
純粹で無垢な詩人の精神	高村昌憲

【童 話】

パンケとペンケ	宿谷志郎
---------	------

執筆者のプロフィール（五十音順）

走り抜けるものがいた

逃げるものがいた

走る走る 青い沼

逃る逃る 乾いた草

追うものがいる

執拗に追うものがいる

食うものと食はれるものの逃走劇は

倒れたものの肉塊の晩さん

ライオンとハイエナとチーターが飛ぶ

ガゼルと野牛と縞馬が走る

フンコロガシのうごめきで

草原の夢が回復するだろう

群らがる獣の眼光が

骨の残骸を透写して

サバンナの白熱の激走の果てに

憤死した屍が地を赤くする

生きるということは食うことで

食われたものの生命は

地平の彼方にゆらめいている

危機と平穏の舞台が輪廻しながら

ライオンと猪が走破する地点から

ハイエナとガゼルが疾走する地点まで

生命の軽さと重みを背負って

何処までも追走劇が繰り広げられて

連鎖の草原がいつまでも輝いている

大人になり切れない私が結婚し

大人になり切れない私が子を産み

大人になり切れない私が子を育てる。

世の中には、そんな大人が結構いて

大人になり切れない者が政治を行う。

なぜか、本当の大人は仏のように無言。

だが、

大人になり切れない私は夢を捨てず

今でも、平和な世界をただ祈る。

コスモス畑の女主人^{あるじ}は
「まほろばの貴婦人」[※]を抱いて
客人を待った
「ミモザ小屋」と名付け
番小屋は葦簀張り
花野の一隅 残照の中

深秋に紛れ
飲むほどに
酔うほどに
叶わなかった昔昔に
おん おん哭いてグラスを傾け

「光の君」を夢見た日
「雨夜の品定め」する男たちに
この一本を興して遊びたかった
と
少年の面影は文学をこよなく愛した

酔がしゃべっているから
さけのつまみに事欠かないが
囀る憂さに風がたって
ワイングラスも空になった

ひとり
ふたりと腰をあげ
細い肩をゆらし
影を引いて消えた

今宵はどんな夢のつづきを
飲みこんでいくのだろうか

〈希望〉なら
その〈希望〉のかたちを
〈絶望〉なら
その〈絶望〉のかたちを
辿ること――
愚直に
辛気臭く。

あたかも
舌が
虫歯の空洞を
しつこく
精確に
這うように。

なぜなら
君の
〈世界〉への問いが
浅はかなら
〈世界〉からの
それへの答えもまた
愚弄的に
浅はかなのだから。

駄目だ
このままでは
〈詩〉にならない――と
その表皮に
こっそり

〈抒情〉を
施したくなるほどに。

演劇に見るのは捏造された事物よりも
事物から想像された観念を導く像です
演劇の面白さは荒唐無稽の動作よりも
大変現実的で直接的な感情の実感です

演劇はよく結びついた真実に関して
観客には熟考と批判の時間を与えます
自由が笑いを伴うと全てに打ち勝って
運命はメカニズムから滑稽に陥ります

この滑稽は感動させて解放させますが
真実の奥底まで表すことはありません
少なくとも結果と共に表すだけですが
真実の奥底は反射的笑いにありません

真実は現実を見ても理解できないので
隠されていることに同意することです
この世は先ず怒りが先に立ちますので
熟考という稀有な働きに捧げるのです

思考や言葉に写した真実は情熱となり
余りに遅延して着いた伝言と同じです
現実の時間が劇場内では不必要となり
永遠に生きる真実を手に入れるのです

人類は弱かった
深夜でも逃げ出せるように
体温と脈拍を遺伝子が培った

逃げる また逃げる
とにかく種の保存のため
他に考える余裕なぞなかった

なぜこうも弱い
今朝も犠牲者を弔った
勝利は偶然でしかない

弱者は本能的に知っている
まいている体躯が露見すれば
確実に迫る死への標的

逃げる訓練が大事
逃げながら忍耐力を鍛える
生存をかけて知恵を絞る

無敵だった恐竜は
逃げるなぞ考えたことはない
なのに信じられない破滅

逃げてトップになった人類
今では恐竜さえ怖くない
逃げるなぞプライドが許さない

どこか似てきた
闊歩していた勝利者の歴史
逃げる、を忘れた無敵の生命体



三浦 逸雄「辛夷咲く空〈北岡善寿の詩『花咲く庭で』をイメージして〉」 8号（アクリル・紙）2019



2014年12月7日（日）に吉祥寺で開催された『一読者の戯言』の出版記念会

北岡善寿さんが亡くなられたと聞き、哀悼の思いに駆られました。生前、故人とは二度しかお会いしてません。「風狂の会」同人の方々のような、長きにわたる親密な交際は望むべくはありません。この拙文も高村さんの慫慂によるものです。

一度目は、数年前、高村夫人の個展会場から、一同で銀座ライオンに繰り出した時でした。闊達な編集者という印象でした。ここで、故郡司勝義さんの話を聞いたのはうれしいことでした。郡司さんは、文藝春秋の編集者であり、中村光夫先生の筑摩書房版全集の全巻校閲をされた方です。30年前、先生の鎌倉での葬儀の際、初めてお会いしました。それから、年一回の先生を偲ぶ会には20年間ほぼ欠かさず出席され、また、個人的にも、著書を交換したりするうちに親しくなり、少数で飲んだりしました。北岡さんが長きにわたり、編集されていた『時間と空間』誌の有力な同人の一人が、郡司さんでした。生前、数冊頂いたことがあります。ここら辺が、北岡さんとの当時は気づかぬつながりと言えはいえるでしょう。

二度目は、昨夏、日本仏学史学会の仲間である高村さんにまでもや慫慂され、「風狂の会」で、講演した時です。「中村光夫と私」という個人的でいささか破天荒な話をしました。詩人の集まりだからいいだろうと思ったのかもしれませんが。幸い、多少とも、皆さまの関心を引けたようで安堵しました。その際、会長として、北岡さんはあいさつされ、当方の略歴を紹介されました。その後、吉祥寺の行き付けの酒店に落ち着きました。北岡さんは少し以前よりは、お年を召されたかなと感じましたが、まだまだ意気軒高でいらして、中村さんたちがいた昭和の文芸時代は面白かったなあ、など、話が弾みました。まさか、一年後に亡くなられるとは、思いもよりませんでした。静かに病み、ふっと消えてゆかれた気がしてなりません。

絶筆と云われる『老人妄語』を読むと、短いながら、日本自然主義作家たち——白鳥、藤村、泡鳴らの織りなす人間模様が、編集者らしい観点から、巧みに描出されています。もっと、続きが聞きたかったと思わずにいられません。

詩人としても、数編しか読んでいませんが、確固たる世界を持たれている方だと存じます。今後、一本にまとめられる機会を期待します。

最後に手元にあった『時間と空間』第49号、2002年7月1日発行の北岡さんの編集後記を紹介します(1)。現在でも少しも古びてないと感じるからです。

(1) 「日本占領軍の司令官ダグラス・マッカーサーが、日本人の精神年齢は十二歳程度であると評したことがある。それから五十年も経過したが、その間に経済大国を作り上げた国民の精神年齢は高くなったのであろうか。問うも愚かである。今では数字による高低よりも、精神そのものの有無が問われて然るべき状況にあるのではないのか。「衣食足りて礼節を知る」という格言らしいものが昔からある。その礼節を知るのは精神だが、衣食過剰の時代に生をうけた者にとっては、礼節の概念も著しく変化しているようだ。礼節とは人を殴り、脅迫し、騙すことらしい。進歩発達したのは精神ではなく、宇宙開発を夢見る科学技術の方だ。道を歩きながら食事をする風俗を身につけた輝かしい現代人は、いよいよロボットに遊んでもらって喜ぶ時代を迎えたようだ。チェーホフの短編小説の一つに出て来る男のセリフをもじって言えば、「俺に言わせりゃ、精神なんて全然なくなっちゃいいんだ、くそ喰らえ！ お前は何だって精神を庇ったりするんだい、貧乏神め！」ということになるのではないのか。妄言多謝。(北岡)」

」『時間と空間』第49号の編集後記から

〈晩秋のある日の午後、窓辺に座って煙草を吸いながら、前方にある五階建の集合住宅の上をゆっくりと流れる雲を見た。澄み切った青空を背景に千切れ雲が白く陽に映えながら動くのである。その雲には虫、鳥、獣、人の顔といった様々な形がある。それを人は面白がって眺めるのである。それを腹に沁み入る感慨をもって詩に書けば、有名な詩人になれることは歴史の証明するところである。〉

これは、北岡さんが、2016年12月に、電子版風狂に書かれた「小人閑居の弁」の冒頭部分です。そして最近、風狂の仲間と何回かうかがった、高尾のお住まいから見た風景にも似ています。山好きでもいらした北岡さんの好きそうな景色です。

北岡さんは文学談義がお好きでした。そしてその世界に非常に詳しかったのです。それは58・59号に書かれている「老人妄語」にもあります。

〈私は本を読んで、これはと思う箇所をノートに引き写しておくのだが、長年にわたってそういう何もならないことを続けて、つれづれに自分の慰みとしてそのノートを捲って見ることもある。最近数あるノートの中に現代の科学技術文明を痛烈に批判した誰かの文章があったような気がして探したが見つからなかった。見つからないとどうでもいいという気になって、別のノートをぱらぱら捲っているうちに萩原朔太郎の発言が出てきた。〉

とあり、その世界は松尾芭蕉のことから、ジャン・コクトー、永井荷風、啄木、正宗白鳥、新体詩と続いて行きます。その発見がいかに楽しそうであり、その楽しい発見はしばしば飲み会での話題にもなりました。酔いのせいか聞き取りにくいこともありましたが、それで文句を言ったり聞き正す人は誰もいません。皆が楽しみ笑顔になっていました。

私と北岡さんとのつながりは、そう古い事ではありません。私が風狂の会に参加し始めたのが2000年頃。先代の風狂の会代表者、齋藤恵氏が2006年に亡くなって、それからの世話人代表が北岡さんでした。とは言うものの既に13年以上が過ぎようとしています。

私にとっての大先輩でありながら、常に北岡さんと呼び続け一度も先生と呼びかけたことはありませんでした。

ここに『風狂の詩人たち』という本があります。2004年に風狂の会十周年を記念して発行されたものです。この会のイベントとして、お花見、暑気払い、忘年会とあり、折にふれて川柳が詠まれました。北岡さんの作品を何句か挙げて見ます。

永田町花も嵐も越えられず	1998年 井の頭公園お花見
世は栄え イカサマ インチキ サギペテン	1998年 川柳忘年会
変人も十日もすればただの人	2002年 川柳忘年会

常に楽しいお話をありがとうございました。

そして、もう北岡さんの文学談義をお聞きすることは出来ないのだ、と思うととても淋しく感じ

ます。（合掌）

私が親しく北岡さんの聲咳に接するようになったのはほんの数年前、いつのまにかの「風狂」同人の一人として恒例の神代植物公園でのお花見や夏の暑気払い、歳末の川柳大会等の催しにお邪魔させて頂くようになってからに過ぎない。そう言えば調布の「海鮮三崎丸」での編集会議にも毎月のようにお邪魔した。編集会議とは言っても主たる目的は昼から酒杯を傾けつつ、該博にして軽妙洒脱な北岡さんのお話を皆で伺うことだ。出席者は毎回数名程度で、その分気の置けない楽しい集いだった。今となっては歴史の証言に類するような文壇・詩壇のこぼれ話や戦争の記憶など、話題はいつも多岐に渡ったが、その時に鋭い機知を交えつつ滔々として留まるところを知らない語り口は、あたかも仙境を流れる清冽な小川のようにだった。「いつまでも若々しい」どころかむしろ「永遠に年を取らない」というに近い、どこか地上の時間を突き抜けたような澄んだ軽やかさがあったのだ。だから、お亡くなりになったと伺っても、享年九十三歳と伺っても、実感としてどうにも腑に落ちない。今も「おう、皆、どうした」と普通に姿を現される気がしてならないのだ――あたかも映画「スター・ウォーズ」のジェダイの指導者オビワン・ケノビやヨーダたちのように。

「ぼくのはしたない希望の日々は／冬至から夏至までで／夏至を過ぎると希望は／日脚と共にだんだん薄らぎ萎む／秋にはすっかり葉を落とし／枯れたふりして寒い風のなか／こっそり芽を孕んでいる／一本の森の木で／毎年その繰り返しで齢をとっている／そんなかじかんだ考えを抱いて／年の瀬の並木道を歩いていると／人に連れられた小さな／死神とすれ違って足を止めた／本当は影として漂う死神ではなく／暗い穴である惨めな目つきが／死神を想わせる痩せ犬である／／元旦の挨拶に遠くから／「新しい年に足が生えて歩き出した」／と言って来た人がある／それなら／わけもなく過ぎた去年は／足のない幽霊であったということか／去年がそうなら一昨年も／いや十年前も幽霊であったはず／ある年は足が生え／またある年は足がない／というのは可笑しなことで／やはり今までずーっと足がなかった／と考えるのがよかろう／この先ぼくの時間には新しい／足らしい足が生えるだろうか／希望と不安が古くなった／蛍光灯のように瞬いている」――「足」（全行）。北岡さんの「風狂」誌上での最後の詩作品だ（第52号掲載）。詠われているのは確かに「老い」であり「死」の予感ですらあるのだが、読後に残るのは地に舞い落ち、積み重なり、静かに土に還って行こうとする枯葉ではなく、むしろそうした過去の時間を振り落とし、裸になり、それでも「この先」の「ぼくの時間」に想いを馳せ、あたかも少年のような「希望と不安」にまっさらな心を戦がせている冬木の梢のようなイメージだ。そして、その枝先が指さす、無限の空。

ご冥福、心よりお祈り致します。

北岡善寿さんの文壇から思想・政界までの幅広い分析力にはいつも驚かされる。冷静な洞察力は時の流れを自らの脚と耳目で客観的に整理・凝視してきた蓄積が膨大であるからだろう。次のエッセイは重層的視点を持ち、新聞に載らない逸話もあり甚だ面白い。

A. 教育のあり方(風狂56号)

日本語が崩れ、死のうとしている時に小学校から英語教育とは何と太平楽だろう。戦前教育復活を願う自民党と日教組の左翼偏向の教育を政争の場にし、本質を見失った。

経済が復興し新幹線が走っても、魂を失った国の倫理的頹廃は止むべくもない。

B. IT盲信の危険性(風狂56号)

ITの恐ろしいのは機械を無謬と信じ、それを故障と思わず相手を疑うことである。

友達の真意よりもチャットの文面を盲信する倒錯に陥って、人を殺した事件があった。

コンピューターは理由なく誤り、その責任を必ず人間(ユーザー)に押し付ける。これがしらず知らず人間(ユーザー)に伝染する。

自分は正しく、悪いのは相手だという人間が蔓延する。子供の時からそのように条件付けられて育った人には余程の智慧と意思がないと、この袋小路から抜け出せない。

後進国日本は手っ取り速く追いつくためにデジタル(理系)を偏重しアナログ(文系)を潰してきた。偏差値・五段階相対評価をデジタル処理し評価する国になってしまった。

ゲーム感覚のいじめ、リーダーたちの国家第一主義などを憂い、幼年教育の大切さについての警鐘は重く受け止めねばならない。

善寿さんの詩は肩肘ついた処がなく、飄々とし、そしていつも謙虚である。

理屈より盃をかざせば桜花、であろうか。

詩に関するエッセイも目線が深い。

「すべての詩は嘘である。だが全ての詩は真実である」 ジャン・コクトー

「俳句とは嘘を巧みにつくこと也」 芭蕉

「叡智が詩のなかに融けていないので、これ見よがしに示されているだけである」 善寿

「数の観念を持って無い『孫の認識』は全てアナログ。本当の詩の創造はアナログから始まる」

善寿

西脇順三郎さんの裏話紹介は趣がある。

好きな歌あり「村田英雄の王将・黒田節・早稲田大学校歌」これを日本三大歌曲と命名した。言葉のリズムに非常な音楽性がある。

風狂尋ね人・北岡善寿さん最後の言葉。

「何と言われようと時代は進む。これが歴史のメカニズム。お人好しの民族は滅びる」(平成最後・風狂57号)

お世話になった五年の歳月。様々な場面で暖かく接していただき、ありがとうございました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

もう何年前になるのか定かではないが、北岡善寿さんに初めてお目にかかったのは、日本詩人クラブの例会のことだった。手許にある一番古い日本詩人クラブの広報誌「詩界」二三二号を見ると発行日は平成十一（一九九九）年六月三十日となっているから、私は既に二十年前には例会が行われていた今はなき神楽坂エミールに時々通っていたようである。当時、私はまだまったく詩を書いてはいなかったのだが……。なぜ私が日本詩人クラブの例会に参加するようになったかという、二三一号までは「詩界」を当初から支えてきた方がレイアウトを請け負っていたのだが、体力の限界ということで辞退され、レイアウトから印刷までを私の会社（待望社）が受注することとなり、打合せや原稿を受け取る必要が生じたためだった。その二三二号の奥付を見ると編集室はなんと「北岡善寿」となっている。その後「詩界」は雑誌形式となり、広報誌は「詩界通信」と誌名を変えて現在に至っている。善寿さんは「詩界通信」一号（二〇〇〇年）から四号（二〇〇一年）、十五号（二〇〇三年）から二十四号（二〇〇五年）までを、広報担当理事として制作に携わっていた。善寿さんは細かいことは仰らずに、淡々と原稿依頼をし、的確な校正をこなしておられた。

日本詩人クラブ例会の楽しみのひとつは、例会後の懇親会、二次会への参加を上げることができる。私にとってその楽しみは、会場が変わった今でも変わらない。神楽坂エミール時代の懇親会は近隣のチェーン店の居酒屋、二次会は蕎麦屋か個人経営の焼き鳥屋というのが定番の流れだった。笥櫛二さん、石原武さん、菊地貞三さん、天彦五男さんたちの後ろにひっついて、私も必ず二次会まで流れていった。その二次会に善寿さんも時々顔を出されていた。お酒と会話を心底楽しむ、善寿さんのその姿勢は最後まで変わることはなかったと思っている。その頃、善寿さんは東小金井にお住まいで、私は高円寺だったので、帰りは神楽坂から地下鉄東西線に乗って高円寺駅までご一緒したものだった。

また二〇一四年八月には待望社から随筆集『一読者の戯言』をご出版いただいた。私は装幀を担当させていただいたが、善寿さんの硬質な文体にふさわしいデザインができたと自負している。同年末に風狂の会で善寿さんの出版記念会が催されるということで、版元として私も出席させていただいた。以後、春のお花見、夏の暑気払い、年末の川柳と、風狂の会に参加させていただくようになった。特に春のお花見には大勢のゲストがいらして、善寿さんの交流の広さを実感したものだ。昨年からは会員として毎号「風狂」にエッセイを載せていただくようになった。私が本格始動したにもかかわらず、善寿さんはいなくなってしまった。残念でならない。心からご冥福をお祈りいたします。

暑すぎる夏休みが過ぎ
学校生活が始まるや
北岡先生（九十三歳）永眠の知らせ。

先生との出会いは、
2016年、春、深大寺植物園
「風狂の会」お花見会

リュクサックから登山用ストック
帽子の下からは、笑みを絶やさず
登山家のように颯爽と登場する。

「高さんですか？遠慮はいらない。」
「私は、酒と話しが好きでね。」
桜満開！ 肌寒い日だがテーブルを囲む。

毎月発行の「風狂の会」電子書籍
先生の詩、評論やエッセイ
知識の豊富さと思考に驚く。

高校の英語教師だったようだが
世界文学、日本文学を通読され
人工知能と文学まで語っていた。

詩人が備わっていなければならない
多角的、複眼的思考の持ち主
弱者の味方、人類愛に満ちていた。

先生の心は、きっと種になり
私達の心で育ち
世の中に光もたらすでしょう。

以前から考えていた「北岡先生の思い出」というエッセイをこの八月に書き上げた。いずれ終焉の日もあることだろうから、今のうちに書いておこうかといった気分であった。あるいは生前に先生のご検閲をいただき、あれこれいじるのも面白いかなと思ったりしていた。自分の死後に発表される自身の追悼文を本人が点検するというのも、風狂らしい面白さではないかと思ってニヤリとしていた。それからひと月と経たないうちに訃報に接した。

終焉近しとは思っていたものの、こんなに早いとは意外だった。酒気を帯びつつ談論風発し、持ち前の健啖ぶりを発揮されてから、まだ数週間しか経っていなかった。その驚きと無念さはじわじわと迫ってきた。そのときすぐに思ったのは、もしこれからエッセイとして先生の思い出を書くとしたら、これほどに伸びやかな文章が書けたとは思えないということだった。

先生と初めて会ったのは、こちらがまだ少年の域を出ていない頃で、先生は二〇代半ばだった。と、その辺についてはエッセイでお読みいただくことにして、まだ魂魄この世に留まり、その辺に徘徊されて酒の匂いを探しておられる頃合いなので、ご冥福を祈るところに留めておきたい。逝去、他界、死去、往生、昇天、物故、不帰、旅立つ、鬼籍に入る、天国に上る、...いろいろな表現がある。「永眠」が一番楽そうなので、「ゆっくりおやすみください」と申し上げたい。

新参者の私ですから、北岡先生との思い出は少ないのですが、三回ほど深大寺植物園での花見を御一緒させてもらったと記憶しているので、年三回として、かれこれ十回以上は酒宴の席に参加させていただきました。

酒が進むにつれ、いい笑顔がますます輝き、雄弁に拍車がかかる。

よくそんな古い事を覚えているものだなあと、いつも驚きつつ感心していました。

ここに先生からいただいた本『一読者の戯言』があります。

「大逆事件」の箇所が目が留まりました。

啄木は朝日新聞の校正係の仕事から帰って、日記にこう書いた。「日本はダメだ」

翌日も新聞を読んで「畜生！　ダメだ！」と涙声で叫んだ。

この本に載っていない天才詩人の歌をたまたま知っていました。

「地図の上　朝鮮国にくろぐろと　墨をぬりつつ秋風を聴く」

「明治四三年の秋　わが心　ことに真面目にありて悲しも」

存命のうちにこんな話をもっと聴きたかったですね。　　合掌。

「誠実にウソをつくのが永田町」と詠まれ一等賞を獲得されましたね。

「風狂の会」恒例の忘年会川柳で、皆んながなる程とうなった面白い作品でした。

お世話人の「北岡善寿」氏と親しくお話する機会は少なかったが、勉強会後の酒席で隣合うと諸々のお話が聞け、特に不条理な兵役の話題になると心なしか語気が荒くなる気もした。学ぶことの多い方でした。あの時詠まれた川柳、「近いうちおいかけてくる消費税」おいかけられて消費税も値上げになりましたよ。

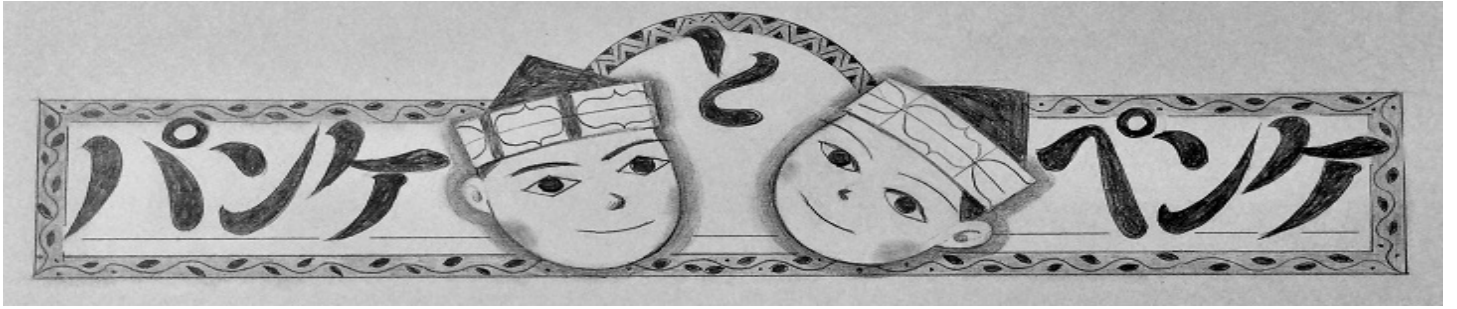
最後の問は、ちょっと難しいものを用意していましたが、叶わぬものになりました。

二度とばったりお会い出来ないと思うと、さびしい。

北岡善寿氏が八月十九日に不帰の客となられた。享年九三歳であった。私が初めてお目にかかったのは、一九九六年十二月に吉祥寺で開催された「風狂の会」であった。その後も会合がある度にお会いしてお話したが、話の中心は現代詩人たちの逸話とか既に亡くなった作家たちのことであった。就中、当時は横光利一に関する話が多かった。横光の小説の外に今日では余り読まれることの少ない日記等をその頃は耽読されていたのだろう。或る会合の二次会も終わって一緒に帰る時、最寄り駅まで歩いて来てお互いに切符を購入してから改札口の手前で、若輩の私を相手に立った儘二人だけで三十分以上も横光や文学の話をしたことがある。話と言っても、その殆どが北岡氏の独白の様なものであった。もう遅いから、と言って私は千鳥足状態の北岡氏を見送ったが、翌朝私は宿醉を心配して電話を掛けた処、奥様が出て来て笑いながら「大丈夫ですよ。今、散歩に出掛けていますから」と仰った。アルコールにも減法強いことを知った。以後、どんなに泥酔状態で別れても電話を掛けないことにしている。いずれにせよ自分の思いを何処でも表現するのが北岡氏の精神である。作品も色々な同人誌等に発表していた。

又、「風狂の会」では毎年春になると神代植物園でお花見をするのが恒例になっている。十年程前に十数名が集まったが、お互いに初対面の人もいたので順番に自己紹介をすることになった。主宰者の北岡氏の順番になったので皆が静聴すると、「この会はそういうことをする会ではないのです、強制があってはならないのです」と自己紹介を咎めたのである。実際に旧陸軍の兵士として軍務に服した経験を持つ北岡氏は、自由が最善であり、強制が最悪であったのだろう。例えばお花見の席でも強制には我慢がならなかったのだと思う。見知らぬ者同士であれば、お互いが自由に名乗って名刺交換でも何でもすれば良いのだ。以後、「風狂の会」では順番に自己紹介を行わないことになった。如何なる表現にも強制や強要があってはならず、自由でなければならないのが北岡氏の精神である。

北岡氏は、詩人たちの会合には機会ある毎に進んで参加していたが、会合に優劣は少しも求めなかった。それよりも会合の喧騒そのものが詩人には相応しくないと考えていた様に思う。何故なら、晩年にまだ比較のお元氣だった北岡氏を囲んで毎月会合を持つことになったが、少人数を強く希望していたからである。純粹で無垢な詩人は表現のみを希求するからである。〈如何なる喧騒も表現するものは何も無い〉とアランは言っているが、詩人が集まってお祭り騒ぎをしても何ら表現にならないことを、北岡氏も了知していたのだと思う。虚栄心や功名心から生じる集団の恥部への別袂に鋭敏な北岡氏の精神は、地位や名誉に関心が無く、只管表現の人であった。まさに詩人として終生純粹で無垢な精神を少しも失っていなかったのだ。衷心よりご冥福をお祈りする。真の詩人の規範として何時までも忘れてはならない人である。（了）



パンケとペンケ（九）

タベはパンケちゃんのお出ましだった。

「おじさん、あした洞窟探検に行くんだ。おじさんも一緒に行こうよ」と誘ってくれる。

どこにあるの？・・・と聞くとアプタだよと言う。

「アプタって」「アプタはねトーヤの先、すぐそこだよ」「トーヤってどこさ」と聞くと「大きな沼（トー）があって、そのほとりがトーヤ。本当にすぐそこだから」

この子たちは妖精だからひとつ飛びだろうけど、本当は結構あるんじゃないかなあなどと地図を見る。

ああここか、アプタってどういう意味かなあと思っていると、ハリガネムシの神様の声がした。

「アプというのは釣り針じゃ。タというのは採るという言葉でな。たぶん海で魚を釣るところということでアプタと呼んだんじゃろう」と言う。

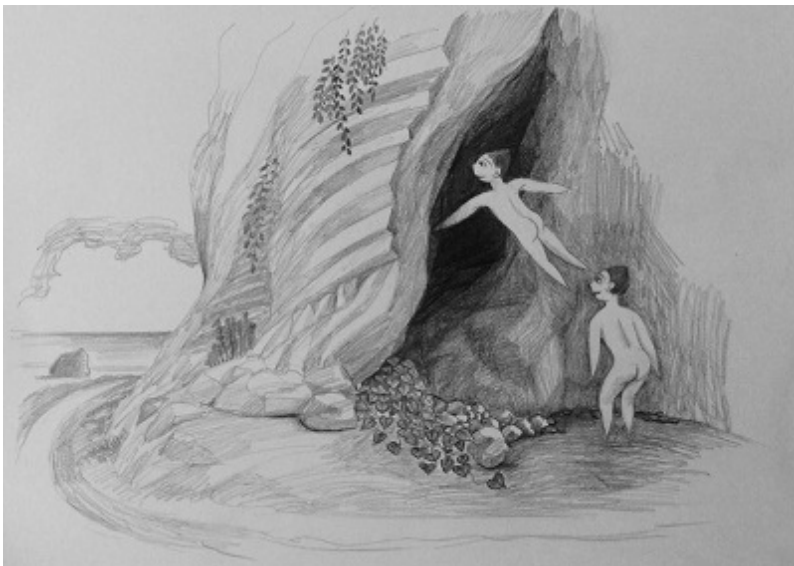
オンボロ軽四輪で25分。アプタの海辺にたどりつくつと、たしかにガケの下に大きな裂け目があり洞窟になっている。すごく深そうだ。

こんな穴の中に入りたくないなあと思っていると、ハリガネムシの神様が「お前はアフンパル（洞窟）には入ってはいかん。冥界の入り口だからな。生きている者が入れば帰って来れなくなるか、万一帰って来れてもすぐに死ぬ」と言う。

また～、脅かして・・・と思ったけど気味が悪いので入り口で待つことに。

1時間ほどでふたりが出て来た。

パンケちゃんは「おじさんすごいよ。この洞窟のむこうはねすっごくきれいな海と大きなコタン（村）があってね、パンケやペンケの里で死んだ人たちがみんな若くなって元気で働いているんだ。びっくりした」と教えてくれた。



パンケとペンケ（十）

パンケちゃんが10歳になって秋も深まると、ウサル川にそれはたくさんのチェブがのぼって来た。

今日はそのチェブの群れを見に行くことになっている。

ウサル川の水面を見ると、ものすごい数のチェブたちが泳いでいた。浅瀬ではジャンプし、渚ではグルグル回っている。

パンケちゃん、ペンケちゃんちょっと興奮状態。僕もその光景に目をみはった。

里の人たちはずっと前から、山に川に狩や漁をして暮らしている。野山では、クマやシカ、イノシシ、キツネ、ムジナ、テンなどをとり、肉を食べ毛皮を利用する。

川ではたくさんのチェブをとり、吊るして干し冬の間に食べるのだ。

余れば、酋長はそれらのかついでいろいろなところに持って行き、この里にはない物と交換して来る。

ずっと北の別の島にも行けば、南の和人のところにも行く。

ハリガネムシの神様は「ずいぶん昔からそうして来たのじゃ。酋長は相手のところにつくと、それらをムヤンケ（みやげ）と言ってわたす。相手はたいそう喜んでの、何日ももてなしてくれ帰りにはいろいろな物を持たせてくれるんじゃ」

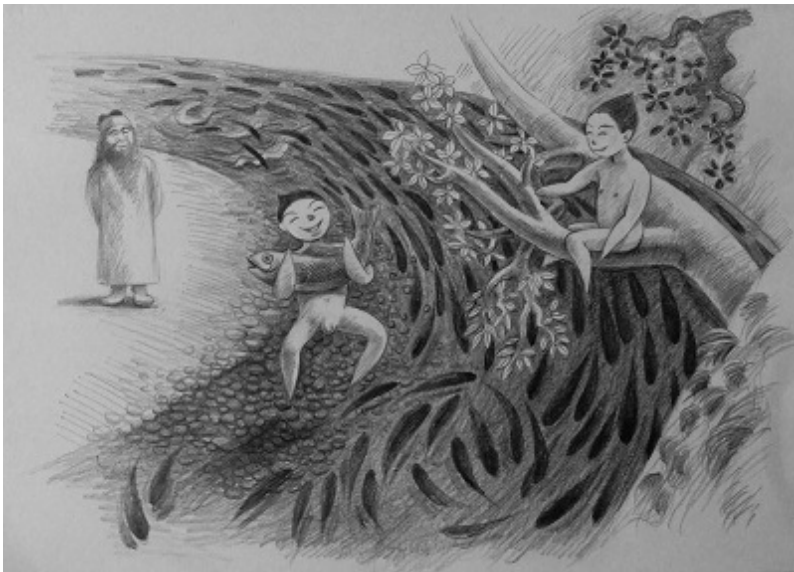
「酋長は里に持ちかえって宴会を開き、里の者たちにおすそ分けをする。みんなたいそう喜んでの、酋長はますます尊敬されるというわけじゃな」

どこの里も規模はここと大して違わんが、山の向こうの海のほうには大きなコタン（村）があり、たいそうなにぎわいだという。

そのぶん酋長の力も大きいようだ。

里にはそんな大きな畑もない。

狩や漁、交易で暮らしていたのか。（つづく）



執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲筑三（いずもつくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めっき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

北岡善寿（きたおかぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んでいる無能なジレッタントにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『樞』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。（二〇一九年八月十九日逝去、享年九三歳）

高 裕香（こうゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノP S T A指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

さとうのりお

一九五〇年、新潟県生まれ。高校卒業後、絵の道に進みたく、反骨、反権力、ユニセックスの雄・長沢節主宰の「セツ・モードセミナー」に通う。四年で卒業後、五年間位エセヒッピー的なぐうたらではあるが、充実した生活を送り、色々あった後、印刷会「待望社」に入社。仕事を通じて、日本詩人クラブ理事長も務めた笈楨二氏と知り合い、彼が発行する動物に関する小冊子に短いエッセイを書くようになる。笈氏亡き後の二〇〇九年より、詩誌「山脈」のメンバーとなり、詩を書くようになる。尊敬する詩人は、笈楨二、ジョン・レノン、村上昭夫。日本詩人クラブ会員。

宿谷志郎（しゅくやしろう）

一九四七年東京都青梅市に生まれる。一九七〇年群馬県高崎市に転居。名曲喫茶「あすなろ」（催華国氏経営）を経てデザイン事務所に勤務。群馬交響楽団のP Rを担当し演奏会のポスターなどをデザインする。一九七七年広告代理店を設立し医薬品、検査機器の広告をはじめ編集、イベントなどを手がける。トヨタ財団助成の「シビクトラストフォーラム」に参加。まちづくりのための資金づくりについて学ぶ。自治体学会創設に市民の立場で参加。一九八七年東京・青山に編集プロダクションを設立し主に書籍の制作。高村昌憲氏の「パープル」に関わり、一九九九年「風狂の会」に参加。大分県経済誌「アド経」に一年間エッセイを連載。明星大学教授・清宮義博氏の『花々の花粉の形態』などを出版。二〇一二年廃業。一年半の休養後、革工芸（革絵）を始める。二〇一七年より北海道に半年の移住を繰り返し専念。趣味はフルーツ。よく聴く音楽はバッハ、モーツァルトの作品。

神宮清志（じんぐうきよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近は視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「落」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高島りみこ（たかしまりみこ）

一九六〇年高知県生まれ、東京都中野区在住。

日本詩人クラブ、日本現代詩人会会員

詩誌「山脈」「花」同人

詩集『海を飼う』（二〇一八年 待望社 第32回福田正夫賞）

装幀家（高島鯉水子）

究極の趣味はキックボクシング（アマチュア）！最近は試合に出ていないが...

高村昌憲（たかむらまさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A & E・二〇〇四年）。翻訳『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ 9 7 1・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤忌詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九八年「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年からパプーの電子書籍に、随想集『アランと共に』（全3巻）及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』（全5巻）『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』『精神と情熱とに関する八十一章』などを登録。日本詩人クラブ会員・日本仏学史学会理事

富永たか子（とみながたかこ）

一九三四年 福岡県柳川市生

日本ペンクラブ・日本現代詩人会・横浜詩人会各会員

「回游」「めびうすの輪」「相模原詩人クラブ」に所属

既刊詩集①『シルクハットをかぶった河童』(第二回横浜詩人会賞受賞)

② 『月が歩く』

詩人北原白秋と同郷。幼児教育に携わり、詩に親しんできた。相模原詩人クラブ主宰。三十五年間詩誌「ひばり野」を年一回発刊し現在に到る。「風狂の会」にて多くを学び席をおく。

長尾雅樹（ながおまさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事

なべくらますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会・日本詩人クラブ・時調の会各会員

樺自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつぐら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

浜田 泉（はまだいずみ）

一九四九年、東京生まれ。一九七二年 早稲田大学フランス文学科卒業。一九七八年 明治大学大学院仏文学専攻博士課程修了。
。一九七八年 フランス・ルーアン大学大学院留学(一九八〇年まで)

現在：比較文芸史家、日本仏学史学会副会長・学術委員長

元：明治大学フランス文学科講師、早稲田大学国際言語文化研究所招聘研究員

主要著書：『中村光夫とフロベール——ロマン主義のあとさき』『夢の代価』『ブルジョワと革命』（以上、成文堂）、『ロマン主義文学の水脈』（緑地社）、『海を超えた日本人名事典』（共著）(日外アソシエーツ)、『ラフカディオ・ハーン著作集第九巻・人生と文学』（共訳）

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロボリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦逸雄（みうらいつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

同人誌 風 狂 (ふうきょう) 第 6 3 号

特 集 追悼・北岡善寿氏

2019年10月21日 登録

<http://p.booklog.jp/book/128262>

編 集：風狂の会（担 当：高村昌憲）

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/128262>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：デザインエッグ株式会社